

Ⅳ 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、アンケート調査により本道の「知的障がい特別支援学校における授業づくりに関する現状と課題」及び「本道における星本の認知度や活用状況」を明らかにするとともに、授業モデル実施校2校と星本活用サポート校2校の協力を得ながら、7人の協力者と授業づくりを行った。

研究協力校との授業づくりでは、児童生徒一人一人の学習状況を丁寧に把握した上で星本を活用することにより、各教科等の段階の目標や内容に即して育成を目指す資質・能力を明確にしながら授業を計画することができ、星本の活用が資質・能力を育成するための授業の充実に効果的であることを確認することができた。

児童生徒の姿から授業を捉えることは、「教師主導の授業」から「子ども主体の授業」へと授業の転換を図ることにもつながり、学習指導要領の趣旨の実現を図る上で大きな成果であると言える。

2 今後の課題

本研究では、知的障がい教育における授業づくりの充実を図ることを目的に研究テーマを設定した。前項で示すように、授業づくりにおいて一定の成果が得られた一方で、本研究で取り扱ったのは「計画-実施-評価-改善」という授業改善のPDCAサイクルにおける「計画-実施」を中心として取り扱ったものであり、「評価-改善」まで含めた一連の検証には至っていない。

さらなる授業改善につなげるためには、「評価-改善」の検証を行うとともに、「指導と評価の一体化」の視点から、児童生徒の学習評価からも指導の状況を評価することで、授業改善を図ることが求められる。

また、本研究でまとめた星本を活用した授業実践は4事例と限定的であるため、研究の目的に掲げた「普及」につなげるためには、本研究の成果である星本の活用の効果を分かりやすく周知するとともに、多くの学校で星本を活用した授業実践を行い、その成果と課題を収集しながら授業モデルの検証と改善を重ねる必要がある。

これらの課題の解決について、本研究における授業モデルの重要なポイントと示した「児童生徒の学習状況の把握から始まる授業づくり」や、研究協力校との取組において大切であった「星本や教科書解説を基にした教師集団の対話を通じた単元の検討」に大きな手掛かりがあると考ええる。

さらに、環境面においては、アンケート調査や研究協力校の意見から、星本及び教科書解説が、道内の各知的障がい特別支援学校に整備されていない状況が多分にあることが示唆される。本研究によって、各学校における教科用図書の採択や研究図書の購入等の一考につながり、各学校においてさらなる授業づくりの充実が図られることを期待する。